2013年度授業改善研修参加レポート　　所属（現代中国学部）　氏名　川村亜樹

「研修会等名称」

大学における国際競争力のある人材の育成

場所：ベルサール半蔵門 イベントホール
期間：７月３１日

１．研修の内容

基調講演「シンガポールの大学の国際化戦略と英語教育」
Phyllis Ghim-Lian Chew 教授
（Nanyang Technological University ナンヤン工科大学）
世界大学ランキングで、シンガポール大学に次ぐランキングにまで急成長してきた大きな理由として、ダブル・デグリーを含めた国際交流の促進を挙げ、インフラとしての英語の必要性を強調されていた。アジア圏における大学間提携熱の高まりが感じられた。

事例発表：「漢陽大学校の国際化と英語教育」
Moonsub Han 教授（Hanyang University 漢陽大学校）
９０年代後半以降の国家的な英語力強化に触れたあと、大学の英語教育の在り方、とりわけ、基本的な日常会話ではなく、ビジネス現場でリアルに必要なプレゼンテーションと交渉に関する英語力の強化対策をおこなってきたとの事例報告がなされた。本学の Communicative English の今後の方向性を検討するうえで有益な情報をえることができた。

事例発表：「立命館大学 生命科学部・薬学部におけるプロジェクト発信型英語プログラム」
鈴木佑治（慶應義塾大学名誉教授、立命館大学教授）
スキル・ベース、コンテンツ・ベースそれぞれの英語カリキュラムを構築し、特に、コンテンツ・ベースの授業において、ＩＣＴを多いに活用しながら、学生が自身の関心あるテーマを英語で調査・研究し、卒業時までに、英語で論文を執筆し、ポスター発表できるレベルまで引き上げ、さらには、その副次的効果として、TOEIC のスコアが、例年、１年次学部全体（全員受験）平均３５０～４００が、２年次には５００前後にまで伸びるという成果が公表された。非常勤まで含めて英語教員が１つのチームとなり、学部の専門教員との連携をはかっていくことが重要であるとも述べられた。立命館大学と愛知大学の入学時の学生の英語力は、TOEIC を基準にすると大差はない。立命館大学にも、提携校や付属校からの入学者もいる。しかし、２年間でその差は大きなものとなっている。本学の英語カリキュラムとの差、そして、その結果としての TOEIC スコアの差があまりにも大きくショックを受けたが、見習うべき点は多分にある。

2．研修の成果

本学の英語カリキュラムの課題が明確化できた。

現在、専任はもちろん、非常勤、嘱託まで含めたチームとしての英語教員間の連携が十分できているとは言いがたい。特に、必修科目の指導方法に関して、従来本学では、さまざまなスタイルの指導に触れるという意図で、あえて、各教員が自由に指導をおこなってきた。しかし、多くの非常勤の先生方に頼らなければならない現状をみても、各科目のより具体的な目標設定と、指導の一定程度の均一化がはかられるべきであると感じた。その際、非常勤の先生方を、授業以外で本学に招集する予算が学内で取れないという課題がある。どうか検討してもらいたい。

コンテンツ・ベース、アウトプット型の科目は、本学の共通英語では、選択科目として、コミュニケーション、ライティングといった形で数科目しか開講されていない。学部専門科目において、外書講読という形でコンテンツ・ベースに関しては補われているはずだが、それでも、学生の自主性を重視した、アウトプット型の英語トレーニングとは言いがたいのではないか。自ら発信できてこそ、初めて、英語を使えたことになるのであり、この点をもっと重視した取り組みが今後必要である。

3．授業への研修成果の反映状況

鈴木佑治先生が刊行されている『プロジェクト発信型英語』（南雲堂 2013）をさっそく読ませて頂いた。関連する動画サイトも参考にしながら、来年度から専門演習、英語 Reading クラス等に導入してく予定である。また、学内の英語教員とも共有をはかっていきたい。

学 部 長	ＦＤ委員長	ＦＤ委員会	名古屋教務 ~~企画・広報~~課長	係
			13.10.9	神 13.8.-5 谷